西合志南小学校 学校だより 文責 田中 宏和

西南小の風

だれかのために じぶんのために いっしょうけんめい

だれもが過ごしやすい学校にするには？

令和5年9月22日
第21号

先週、児童会委員会活動の各委員会の委員長と副委員長の児童が参加して、委員長会議が行われました。会議名は「服装のきまり検討委員会」です。

当日の話し合いに立ち会うことはできませんでしたが、近年はこのような校則を児童・生徒が主体となって見直す動きが増えています。特に、以前からある集団生活を管理するために定められていたルールや、当時の大人ひいては社会が考える「小学生らしさ」「中学生らしさ」を求めるためのルールなどが対象となり、一部の極端なルールがいわゆる「ブラック校則」と呼ばれて、メディアの話題に上ることは珍しくありません。

校則に限らずルールを変える、又は廃止する場合は、そのルールの意図やそれができた背景をしっかりと確認して判断する必要があります。無くしてしまう、変えてしまうのは簡単ですが、実は必要なことだったと後で気づくことがあるからです。校則に関しては難しい判断もあります。中学校に勤務していた頃、校則の見直しを求める生徒・保護者が考える「中学生らしさ」と、地域社会が中学生に求める「中学生らしさ」と、高校受験の際に高校側が受験生に求める「中学生らしさ」が、三つとも異なり、時代の要請や生徒・保護者の気持ちも理解できるのですが、中学校として生徒の利益を考えれば、変えるべきでない、また、変えるのは時期尚早だというような内容の校則もありました。

一方で、校則そのものに対する考え方も様々で、学校は集団生活をする場所であると同時に勉強する場所であるから、必要のないものや華美なものは禁止すべきという厳しさを求める考えも根強いものがありますし、それも一理あることです。外国の学校はもっと自由だと言う人もいますが、それはその国やその学校によるところが大きく、日本の学校よりもずっとルールが厳しく、有無を言わさずに守らせるところも珍しくありません。これは環境や文化に起因することなので、何が良い、又は正しいとは一概に判断できないことだと思います。

但し、LGBTQの多様な性自認に基づく見直しは今後益々進められるべきです。これは、児童生徒主体ではなく職員による見直しになることが多いと思いますが、現在、多くの中学校で見直しが進められています。合志市でも同様です。尚、本校では具体的な検討にまでは至りませんが、LGBTQに関する知識・理解や対応に関しては、研修を行っているところです。性的マイノリティの子どもは、早ければ小学校高学年で自分の性を認識すると言われています。中学校では進められていますが、小学校でも人ごとではありません。

虹色の旗は、多様性を表すLGBTQのシンボルです。

さて、「服装のきまり検討委員会」は、次の三つを目的として実施されています。

○児童が学校のきまりを見つめ、考え、見直すことできまりを守ろうとする意識を高める。

○児童が主体的に服装のきまりについて検討する活動を行うことで、自己指導能力を育てる。

○児童がより前向きに生活することができるよう、自分の好みに応じて標準服を選択することができるようにする。

担当の職員に聞くと、当日の話し合いでは、「くるぶしソックス」「使い捨てカイロ」を許可してもいいのではないかというような話題があったようです。その話し合いの中で、

「くるぶしを出すことでケガが増えないか？」

「今、使い捨てカイロが禁止なのはどうしてか？」

など、ルールの根拠を確認する話題にもなったといいます。また、

「現状、足のケガは多いのか？」

「マスクがよく捨てられて落ちているけど、カイロも捨てられるのでは？」

「今この場でくるぶしソックスをはいている人がいるけど、今禁止なのにそれはなぜ？」

など、現状への問いや突きつけも参加児童や職員から出されたようです。

集団生活を維持向上するために、児童・生徒にはその当事者として、ルールを守らされている意識や、ルールが自分たちを縛るものという意識を変えていくことが必要です。

自分の欲求ではなく、学校をよりよくし、皆が過ごしやすくするにはどうしたらいいかという、利他の視点で考えることや、それぞれの意見を出し合って納得解をひねり出していくことは、大変高い教育効果があると思います。

「服装のきまり検討委員会」は、今後も話し合いを継続していきます。保護者の皆さまへもアンケート等をお願いする機会もあるようです。学校生活の大切な内容を決める場でもあり、同時に教育の場でもあります。ご家庭でも、西南小をよりよく、より過ごしやすい場にするにはどうしたらいいかという視点で話をしていただくことが、子どもたちの成長をより促すことにつながると思っています。